

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	津久井やまゆり園障害者殺傷事件の社会学的分析Ⅲ				
研究組織	代表者	所属・職名	短期大学部・教授	氏名	佐々木 隆志
	研究分担者	所属・職名	聖和学園短期大学部・講師	氏名	緑川 浩子
		所属・職名	福井県立大学・教授	氏名	佐野 治
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	短期大学部・教授	氏名	佐々木 隆志

講演題目	障害者殺傷事件の社会学的分析Ⅲ -事件から5年目を振り返る-
------	--------------------------------

研究の目的、成果及び今後の展望	<p>はじめに：津久井やまゆり園は事件から5年目を迎えた。その事件現場にグループホームが新設され、現在、芹が谷にいた利用者さんは、元の場所に戻り生活が始まっている。2021年4月東京パラ聖火の採火場所として、神奈川県及び相模原市が記者報道した。研究代表者の佐々木と相模原殺傷事件被害者側滝本弁護士、そして被害者を代表して尾野さんの三者で行政に対し、オリンピックの平和理念に反し、採火場所を変更するよう強く要望した。相模原殺傷事件は、2016年7月元施設職員が入所者45人を殺害した事件である。この事件の動機に、社会学の視点から複合的要因が推測される。筆者らは、事件が起きた背景に、人と社会環境の不調和・生きづらさを仮説にあげ分析を行った。</p> <p>研究目的：事件から5年目を迎え、相模原殺傷事件が起きた背景について、植松死刑囚の生育歴をもとにライフストーリーの研究手法により分析を行った。植松死刑囚の生い立ち、生活環境、社会環境など長時間に渡り津久井やまゆり園周辺住民の方々から、事件の様子、植松の小学時代から卒業後の就職やまゆり園採用から事件が起きるまでの期間、人的、物的、社会的環境を中心にまとめた。</p> <p>研究成果：事件の背後にある問題は、ソーシャルワークの母といわれる、M.リッチモンドの理論により分析した。リッチモンドによればその人が抱える問題は「人と社会環境のなかで生じる諸課題に対して、問題解決に向け環境調整を図る」としている。第一に、植松を取り巻く人的環境のかで、小学時代から植松の誤った考え方に対して、その場面で適切な指導を行なわれてこなかった点。第二に、高校時代から赤の洋服を好みトランプの真似ごとをし、態度が徐々に変わってきた点。第三に、第二の理由を裏付けるものは、友達関係と近隣住民に対する態度の変化である点。第四に、事件後津久井やまゆり園では、身体拘束も含め、利用者に対する支援で多くの課題が明らかになった点。上記のことを総合的に考察すると、現代社会のなかで、植松の考え方が社会的な不調和のなかで生成・発展したことになり、周囲の人的、物的、社会的環境のなかで誰もその行動を止めることが出来なかったことが孝橋理論にある社会的問題にあたる。この事件と福祉現場の関係性は深い。にもかかわらず、多くの先行研究や報道関係は、社会福祉現場の実情にホーカスされていない。今後も継続研究を行う。</p> <p>プレスリリース：</p> <p>①「パラ採火事件現場が祭典の地に？当事者不在の「共生社会」利用者・家族へ説明なく決定聖火場所に」毎日新聞、夕刊一面（2021.4.21） ②「大自在」静岡新聞、第一面（2021.7.25）</p> <p>③「相模原事件風化防ぐ静岡で県内学生ら啓発」静岡新聞（2021.7.24）</p> <p>④「相模原事件 IN SHIZUOKA シンポジウム」静岡新聞（2021.12.20）</p>
-----------------	--